

2025年度日本数学会出版賞受賞者のことば

NPO 数学みえる化プロジェクト

このたびは、日本数学会出版賞という身に余る栄誉を、NPO「数学みえる化プロジェクト」にご授与いただき、誠にありがたく、光栄に存じます。本プロジェクトの代表を務めております、正宗淳と申します。

このような賞を頂けたのは、創始期から共に活動してきた仲間の皆様、展示や出版、動画制作、普及活動に尽力して下さった先生方・学生・生徒の皆さん、支えて下さった多くの方々のお力添えがあってこそです。心より御礼申し上げます。

「数学みえる化プロジェクト」は、2018年に北海道大学および札幌近郊の高校教員を中心とした勉強会として出発し、2022年には北海道大学総合博物館での夏季企画展「感じる数学 Tangible Math～ガリレイからポアンカレまで～」を開催いたしました。展示には延べ4万3千人を超える方々にご来場いただき、同年には関連書籍『感じる数学—ガリレイからポアンカレまで—』（共立出版）を刊行し、YouTubeでの解説動画の配信も行いました。現在ではNPOとして展示やワークショップ、寺子屋などの活動を継続しています。

この活動は本務の仕事とは別に、趣味として、ボランティアベースで行っているものですが、私自身、歴史を通して数学に向き合う意義をあらためて実感いたしました。近代科学の礎を築いた先人たちの思索や視点を追体験することで、数学をより広い歴史的・文化的な文脈の中で捉える意識が芽生え、研究や教育の現場においても、視野を広げる貴重な機会となっております。また、数学の魅力を、その厳密さや抽象性の奥にある「手触り」や「ひらめき」として伝えるにはどうすればよいのかを考える中で、初めて数学に心を動かされた瞬間が呼び起こされる感覚が幾度となくありました。

さらに、この活動を通じて、大学という枠を超えて多様な立場・分野の方々と出会い、一緒に活動をする機会にも恵まれました。そうした中で、数学が社会からどのような期待を寄せられているのか、どのようなかたちでその期待に応えていけるのか、改めて考えるようになりました。

今後も、微力ながら、数学の魅力や価値を社会と分かち合う営みを続けてまいりたいと存じます。

末筆ながら、このたびの名誉ある賞にあらためて深く感謝申し上げますとともに、今後とも「数学みえる化プロジェクト」の取り組みに、温かいご理解とご支援を賜れましたら幸いです。

正宗 淳
東北大学大学院理学研究科教授

服部 久美子 氏『数学のための英語教本—読むことから始めよう』

『数学のための英語教本—読むことから始めよう』で、2025年度日本数学会出版賞をいただき、大変光栄なことと思ひ感謝でいっぱいです。

『数学のための英語教本』は都立大学数理科学科で担当していた「数学英語」の授業資料から発展したもので、出版されてみると、数学の学生・先生のみならず、数学好きの社会人、予備校の先生、高校生、他分野の大学の先生・学生と、広い層の方々に読んでいただいています。数学をある程度学ぶと、英語で書かれた魅力的な本がいくらかでもあることに気づきます。数学は厳密さの上に成り立っています。ですから正確に読まなければ数学ではなくなります。そのためには知っている単語をつなげて文の意味を推測するのではなく、文の持つ情報を正確にもれなく引き出す必要があります。その助けになる本にしたいと思って書きました。

サブタイトルは「読むことから始めよう」ですが、「始めた」方々が英語で数学を書く第一歩を踏み出そうとするとき、背中を押すような本になってほしいと思っています。

数学者が数学ではなく英語の教科書を出版するので、ひとりでは不安です。そこで数学好きの言語学者原田なをみ先生とイギリスの数学者 David Croydon 先生と一緒にやってきました。また、共立出版、特に編集ご担当の大越さんは売れ行きがまったくよめなかったこの本を世に出してくださいました。出版賞は私一人だけでなく監修のお二人に、そして共立出版さんに対する賞でもあります。

都立大は定年退職しましたが、頂いた賞を励みに、講義（非常勤）、数学、本の執筆、翻訳など力尽きるまで続けていきたいと思っております。

服部 久美子
東京都立大学名誉教授

* * * * *

野口 潤次郎 氏

この度は、栄誉ある日本数学会出版賞をいただき、たいへん有り難く存じます。書いてきたのは、大学生あるいは大学院生向けのいわば専門書、一般向けのものではないので出版賞をいただけたとは思ってもみませんでした。まずは、推薦書を書いて下さった方がおられるわけで、その方を始めとして、関係者に心より感謝申し上げます。

丁度干支で一回り前の2013年（平成25年）の春に定年退職しました。その頃、英文の本二冊の出版に注力していて、講義はしばらくお休みという状況になりました。時折ある、集中講義や研究集会でのレクチャーシリーズのようなものは本の原稿の確

認の意味もあったので引き受けましたが、基本無職で、そのままズーッと今に至っています。日常的には、自分の専門の研究時間以外は、現役時代の講義や委員会に充てていた時間を、全て本を書くことに振り向けた生活を送ってきましたので、今回の受賞の連絡を受けたときは、たいへん嬉しい気持ちになりました。改めて、感謝です。

本を書くということは、もちろん分かっていることを書くのですが、それを順序よく組み立てて、分かりやすく記述する、というのは非自明です。‘うまい証明’を探るのは、それが他の人のものでも、時に自分の工夫した別証明でも、かなり面白く、それを‘うまく書けた’時は、「ヨーシッ」と結構な満足感が得られます。

受賞理由にある「岡潔の数学」は、正にそのような対象です（内容については、ちょうど雑誌『数学』第77巻3号に拙著論説が載りますので、それをご覧ください）。多変数複素解析の基礎理論なのですが、どういうわけか基礎理論として学部学生向けに書かれた本があまりなかった。自分が学生の頃は、あっちを読み、こっちを読みして、つなげて自分用のノートを作るという状況でした。現役のころ、既存の教科書を色々参照しながら講義をしていて、入門基礎であるにもかかわらず、いつも不満足感が残るのが「解析的部分集合」の話でした。その基礎は、岡の三連接定理です。日本の数学の宝である岡数学をこのままにしておくのはもったいない、と思ったのが動機でした。

さて、これでどの程度‘うまく書けたか?’は読者の判断を待つしかありませんが、個人的には、もう既に正則関数の定義で書き改めたいところが出てきています。やはり、分かっていることを書くのではあるが、書いてみないと分からないことがある。将来、もっと‘うまい本’が出てくることを期待しています。

野口 潤次郎
東京大学名誉教授／東京科学大学名誉教授